

弘前のねぶた絵を確立した 竹森節堂

たけもりせつどう

一八九六年（明治二十九）正月二日～一九七〇年（昭和四十五）二月二日 職業 画家

本名は規矩次郎^{きくじろう}。弘前市土手町に生まれる。竹森家の本家筋^{ほんけすじ}には、竹森華堂^{かどう}がいる。父、美信^{よしのぶ}（辰三郎^{たつさぶろう}）は、狩野派^{かのうは}の流れをくむ画家であった。節堂の弟清八郎^{せいはちろう}はねぶたを描き、その下の弟雄次郎^{ゆうじろう}は、神社に掲げる絵馬^{えま}を多く残している。節堂は成長後、志^{こころざし}を得て上京し、弘前を離れるが、常にねぶたに対する情熱を失わず、絵の修業の積み重ねをねぶた絵にも生かしていった。

弘前のねぶたは、古い歴史をもっている。扇型^{おうぎがた}や人形型など、その形式はさまざまで、描かれる人物も、特に定まっていなかった。そのような中であって、優れた絵画的な手法を用いて、人物の描き方を確立し、一応の様式をうちたてたのが、竹森節堂である。この節堂の人生を、ねぶた絵との関わりの中で見てみよう。

一九〇七年（明治四十）節堂が十一歳の時に、狩野流の画法を得意としていた八戸鶴静^{はちのへかくせい}について、絵画の基本を学んでいる。狩野流は当時の絵画界では、お抱え^{かか}絵師^{えし}の流れをくむものであった。節堂が弘前高等小学校を卒業する頃には、すでに相当な技量を積んでいたのであった。

この画法は、節堂の画業の全期にわたって色濃く残されたといつてよい。一九一二年（明治四十五）十六歳の頃には、寺嶋泉岱（天真）について南北合法の漢画を学んだ。このころ板柳町の狐森稻荷神社に「川中島合戦図」の掲額を揮毫している。泉岱は、弘前女学校の嘱託もしており、図画や習字も、教え方がうまく、節堂の技術を高めたとされる人である。「節堂」という雅号は、泉岱から贈られている。

この頃、弘前のどんな絵描きでも、ねふた絵を描かない人はいなかった。最初の師である鶴静などは、土手町から依頼されて、大型の勇壮なねふたを描き、喝采をあびたという。幼い時からねふたに強い興味を抱いていた節堂も、市内の多くの町内からねふた絵を依頼されるようになっていた。十六歳の時には、和徳町の通称、寺コ通りのねふたを描いている。また上京前の一九一五年から四年間に、陽明館少年団の扇ねふたなどに、「水滸伝」、「呉越軍談」、「三国志」を描いていた。

節堂が上京する契機となった弘前美術展覧会は、一九一八年（大正七）、弘前市蔵主町の仮公会堂で三日間に渡り開催された。弘前の日本画家たちが集まったもので、中瓦ヶ町にあった八戸鶴静の家を事務局にして、竹森節堂が中心となり、八戸鶴静、寺嶋泉岱、今抱夢、清野八の助、三上大弘、工藤桜郎、佐藤雄獄らが作品を出した。展覧会は展示を割愛するほど出品作品が多く、予想以上に盛況であった。団体で来た高等小学校の生徒などもいて、参観者が五百名を超えた。

この時のことである。節堂は、東京に出て著名だった前田昭雲に手紙を出した。昭雲は、在京の芸術家たちを集めて、「六花会」を結成

していたので、節堂は、昭雲への弟子入りを希望したのであった。ところが、昭雲からの返事の手紙には、

「田舎で、お山の大将みたいになって展覧会をやるなんて生意気だ」

とあった。そこで節堂は、早速折り返しの手紙を書き、

「大魚は大海で泳ぐ、小魚は小川で泳ぐ。これは自由ではないか。小川の小魚が、大海の大魚に文句を言われる必要はない」

と、やり返した。そして、参考までに弘前美術展に出品した自分の作品を送った。すると間もなく昭雲から、

『一週間以内に上京せよ』

という手紙が来たのであった。

節堂が勇躍上京したのは一九一九年（大正八）二月であった。しかし、このころの六花会はすでに最盛期を過ぎており、会の集まりも少な

く淋しい時代になっていた。そのため、節堂は東京美術学校の助教授をしていた小泉勝爾の指導を受けることにした。勝爾は東京出身で、

母校の助教授をしていたのであるが、東台邦画会の委員をつとめていた。若い節堂はここで日本画の画風を学び、めきめき腕をあげていく。

六花会は、「北溟会」に改称されるが、長続きせず結局は霧散する。このため節堂は、在京の若手美術家達と共に「白曜会」を結成するこ

とになる。白曜会はもともと日曜ごとに集まって勉強することにしてしたが、日曜会ではキリスト教の集まりのようだったので、白曜会に

改めたというエピソードがある。

一九二一年（大正十）六月、白曜会の第一回展が、弘前市の住吉町にあつた長安倶楽部で開催された。この時の出品は彫刻が多く、中野桂樹、三国慶一、工藤敬三、それに洋画の今純三、日本画の竹森節堂で、合わせて七名であつた。第二回展は一九二二年（大正十一）六月に、青森市の赤十字社支部と弘前市和徳の久一呉服店の樓上で開催した。第三回展は翌一九二三年（大正十二）六月、青森市の赤十字支部と、弘前商工会議所で開催している。この時の白曜会の会員は、日本画部では、竹森節堂のほか野沢如洋、越前翠村、洋画部では、下山喜八郎、小林喜代吉、工藤みさを、森旭、今純三、彫刻部では、石戸谷剛、三国慶一、早坂三吉郎、工藤敬三、中野桂樹らで、彼らの活躍によつて、わが郷土にもたらされた影響は計り知れないものがあつた。特に、この中で一番若い竹森節堂の活躍は注目された。

第三回展で帰省した節堂は、松森町の青年連合会の大型ねぶたの絵を揮毫される。そしてつぎつぎに依頼が続いた。そのおかげで、この年起こつた関東大震災の被災を免れている。翌年も鍛冶町の「三国志」を描いた。節堂の絵は、人物や武者絵が多く、ねぶたにむいていた。東京へ出ても、故郷のねぶた絵の心を忘れてはいなかつたのである。

昭和に入つた一九三〇年（昭和五）、節堂は、郷里弘前から出ている先輩蔦谷龍岬に師事する。龍岬が「東奥美術社」を結成するとこれ

に加わり、会の運営から会計まで任される。この時、節堂の技量の確かさとともに、積極的な行動力が認められることになる。しかし、東奥美術社は、龍岬が亡くなると経営難に陥る。そこで経済的に苦しい東奥美術社を救うために、節堂は当時の東奥日報社の山田金次郎社長と話し合い、東奥日報社が主催する東奥展と併催の形をとることに成功する。併催は三年しか続かなかったが、その後の青森県の美術をいかに刺激したかは、東奥展の発展をみてもうかがい知ることができる。

一九三七年（昭和十二）、龍岬没後の師のあとを求めて、のちに芸術院会員にもなった野田九甫の画塾に入門している。野田の教えを受けた節堂は、一九三七年（昭和十二）ごろから一九四三年（昭和十八）まで日本美術協会展に出品し、連続入選を続ける。そして、一九四〇年（昭和十五）には、日本美術協会の会員に推挙されるのだった。

日本美術協会への出品作品は、一九三七年（昭和十二）一〇三回展「貴妃」、一九三八年（昭和十三）一〇六回展「津軽佞武多祭」、一九三九年（昭和十四）一〇九回展「朧月夜の内侍」、一九四一年（昭和十六）一一三回展「雪女」、一九四二年（昭和十七）一一八回展「津軽七夕（ねぶた祭）」である。美人画とねぶたを画題としたものばかりであった。（グラビア「燈影」参照）

一九四一年（昭和十六）に始まった戦争が激しくなり、節堂は一九四四年（昭和十九）暮れ、空襲を避けて弘前に帰ることになる。このこ

ろから物資の統制とうせいによつて、絵絹も配給制はいきゅうせいになった。そして中央の美術統制会に所属しなければ給付きゅうふにならない状態になった。節堂は、統制会の代表となり仲間の画家たちを助けた。この節堂の働きで、戦後、他に先駆さきがけて弘前の美術界が発動を始めることができるのである。

一九四六年（昭和二十一年）弘前に、青森県日本画家連盟が誕生する。節堂がその代表者となった。連盟の事務局は瓦ケ町の松井泰の家で、会員は成田たいこ太古、高橋ちくねん竹年、伊藤たかゆき孝之、岡部おやう陽、石沢いしざわ龍峡、吉崎よしざき微笑、佐々木俊雄らであった。同年十一月、戦後初めての展覧会が第二大成小学校で開かれている。連盟の展覧会は、かくはデパート、商工会議所、市立図書館等を会場に、一九五一年（昭和二十六年）まで続けられた。

この間、一九四七年（昭和二十二年）に、節堂は再びねぶたの制作を行う。終戦で帰郷後、久しぶりに見たねぶたに節堂は驚嘆した。それはまさに、大衆の喜びの祭であった。そして節堂は、二十四年ぶりに故郷弘前で、ねぶた絵を描き始めるのである。

一九五八年（昭和三十三年）、青森県文化振興会議が発足し、青森県美術展（県展）が開かれることになった。節堂は日本画部の常任委員じょうにんとなり、県展の開催に尽力じんりょくする。一九六〇年（昭和三十五年）には、日本画部門の審査委員となるが、県展には毎年力作を発表し続けたのであった。

この頃から日本画の絵具を用いて、鑑賞用のねぶたを描き、新しい分野を開拓していった。かくはデパートの壁面へきめんを、多くの作品、特にね

ふた絵で飾ることになる。これは古都弘前を宣伝するものとして大変好評だった。

一九六六年（昭和四十一）には、青森県文化振興会議の副会長となり、その秋には同時に日本画を通じて芸術文化の向上に尽くした功績が認められて、青森県褒賞を受けた。

すでに高齢にはなっているものの、弘前市の三上重治の依頼で、登場人物百数十人に及ぶねふたの運行風景の屏風を手がけ、一九六八年（昭和四十三）に完成させた。この外、三沢市祭魚洞文化会館のねふた絵の大壁画、弘前市西茂森蘭庭院の十六間半もの襖絵や壁画、正伝寺の掲額、十六羅漢の大衝立等に彩筆をふるった。

一九六八年（昭和四十三）、弘前市から功労賞を受け、同時に青森県文化賞を受賞している。しかし、翌々年一九七〇年（昭和四十五）二月二日、高血圧性の心不全で急逝した。

節堂は、ねふた絵の制作を、一九六九年（昭和四十四）まで続けた。通算して三十二年間余、描いた数は二百数十台にのぼる。その大部分は、高さ五メートルもの大型で、まさに弘前ねふたを芸術の域まで押し上げた人であった。

制作は年に七〜八枚に及んだが、描く前には日本画の本画制作と同様、克明な下図を作るのが常で、それを拡大して制作するという方法を

とった。そのため、多くの下図が残されている。大半は正確な彩色がほどこされたもので、大変貴重なものと言ってよい。美術的にも価値のある遺産である。

節堂の理想は高く、ねぶたを芸術的にも観光的にも価値のあるものにしていきかけた。節堂はこう話している。

「我々が毎日食べる米や味噌は誰がつくる。生きていくには農民、漁民、職人、工員、商人、会社員などの、いわゆる大衆のお世話になっている。一人の富豪の床の間を一幅の掛け軸で飾るだけよりも数万、数十万の大衆が見て喜ぶのが大切である。これが本当の意義のある仕事である。」

若い頃、日本国中を歩いて、庶民の生活を肌で知っている節堂ならではの考えが、この言葉に表われている。芸術のあり方に対する節堂の識見の高さを示すものではないだろうか。

参考文献 中畑長四郎『津軽の美術史』一九九一年（平成三）北方新社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二九二―二九九頁